

2018年1月10日

博士学位審査 論文審査報告書（課程外）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 松田 俊介
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 儀礼をめぐる情報の表象と編集 ―強飯式の人類学的研究―
論文題目（英文） Representation and Rewriting of the Information on Rituals: An Anthropological Study of *Gohan-shiki*

公開審査会

実施年月日・時間 2017年11月30日・13:00-14:00
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第四会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・准教授	原 知章	博士（文学）	早稲田大学	文化人類学・民俗学
副査	早稲田大学・教授	森本 豊富	Ph. D. (Education)	UCLA	移民研究
副査	早稲田大学・名誉教授	蔵持 不三也	博士（人間科学）	早稲田大学	文化人類学

論文審査委員会は、松田俊介氏による博士学位論文「儀礼をめぐる情報の表象と編集 ―強飯式の人類学的研究―」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問：第4章で取り上げられた家中の強卵式に関して、「鷲宮神社」の名をもつ他の神社にも共通のものとして、教条的に鶏・卵を禁食にする取り決めがあったのか。

回答：強卵式以前の禁食状況については諸説あるが、元から禁食の規則とされていたというよりは、住民が自分たちの神使に対しての尊崇の念を、禁食の掟へと転化させたものと考えられる。

1.2 質問：本研究において「情報」を分析概念として用いることの妥当性は何か。

回答：本研究では「情報」を、当該社会において生成されていく布置的な意味内容として捉えており、そのことを注記したが、本文内でのより詳細な記述が必要と考える。

- 1.3 質問：輪王寺の日光責めについて、時代を経ても儀礼内容が固定化されていることに何らかの意義はあるか。

回答：たしかに輪王寺は、日光責めの儀礼内容を維持し続けているが、三社権現を背景にした寺社権力の権威発場の場としてのあり方は、現代では形骸化しているといえる。テキストがあえて維持されつつ、「地元名士への饗応の場」「参観者への祈祷の場」としてコンテキストを変えられて受容されているという状況には、重要な意義を見いだせる。

- 1.4 質問：各事例の強飯式に通底した共通理念のようなものはあるか。

回答：日光責めや子供強飯式、強力行事の事例では、日光修験の思想や行法に由来する、山伏・強力、あるいは山に対する畏敬の念が、各口上や言説に色濃く見られた。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 本研究の対象である強飯式を語るうえでは、その背景とされる「日光修験」により詳細な説明を加えるべきである。また、第1章の構成として、対象の概要（修験道の話題を含む）を記述してから、先行研究について論じる流れにしたほうがよい。

2.1.2 先行研究に対する批判的検討をより深く掘り下げるべきである。

2.1.3 第3章でとりあげられた七里の子供強飯式については、現地に存在する集団間のギャップに関して論じたうえで、強飯式の性質を検討すべきである。第4章でとりあげられた発光路の強力行事については、カーニバルとの比較を盛り込んで、その反権威性を論じたほうがよい。

2.1.4 英文タイトルには、邦文タイトルの意味との齟齬があるので修正するべきである。

2.1.5 冒頭にグローバル化に関する引用文を含めた記述があるが、本論文の全体的な主旨とは一致しない。削除したほうがよい。

2.1.6 本論文において用いる「情報」概念について、本文内で説明しておくべきである。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1 日光修験に関する来歴の説明を行い、強飯式の歴史的位置づけに関する記述を加筆した。また、研究対象である強飯式の概要に関する記述を、先行研究の検討の前に加えた。

2.2.2 文化変容という主題において語られてきた、近代化解釈論に対する批判的検討を加筆し、儀礼研究における本研究の立場を明確にした。

2.2.3 子供強飯式への検討として、地域内の集団間に見られる意識的な相違について掘り下げた言及を行った。発光路の強力行事への検討として、同様に反権威性をもつカーニバルとの類似点・相違点について加筆した。

2.2.4 英文タイトルを“Information Behavior on Representation and Rewriting for

Rituals: an Anthropological Study of Gohan-shiki” から “Representation and Rewriting of the Information on Rituals: An Anthropological Study of Gohan-shiki” に変更した。

2.2.5 冒頭部が本研究全体の主旨を俯瞰できるものになるよう、構成を修正した。

2.2.6 本研究で用いる「情報」概念の説明を注ではなく本文で行なったうえ、加筆した。

3 本論文の評価

3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、栃木県内の日光周域に分布する強飯式を対象とし、現代の儀礼がさまざまな地域的な事情の影響を受けつつ、いかに情報的に編集され、表象されているか、どのような異なる領域の事象と関与しているか、系統を同じくする儀礼同士がいかに共在しているか、を追究することを目的としている。この目的の背景には、現代における儀礼概念が顕著な多様性を帯び、包括的定義が困難となっている状況と、こうした状況下にある儀礼の理論的考察のためには時代的な問題意識を掘り下げた事例研究の蓄積が必要という発想がある。このような背景に裏打ちされた本研究の目的は、明確かつ妥当であると判断するものである。

3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文は、2009年から2016年までの期間に継続的に実施された人類学的フィールドワークを基礎としており、日光周域に分布する強飯式の実態をある程度網羅的に検討している。とくに重要と目される事例に関する記述は、儀礼の準備・実施期間および実施後に行われた多数のインフォーマントに対するインタビューに基づいている。論文には、インフォーマントとのラポールを形成したうえで初めて得られるような情報が多数盛り込まれており、設定された目的を達成するために必要なフィールドデータの獲得に成功しているといえる。なお、本研究では、インフォーマントに論文の主旨や公開範囲の説明を行って同意を得ていることに加えて、匿名性・プライバシー等に留意してフィールドデータが取り扱われており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、各事例に対する記述・分析を通じて、儀礼が住民の生活全般（転出入・生業・食文化・教育・自治・社会関係など）を反映しつつ、いかに情報的に編集・表象されているかが明確に示されている。それぞれの強飯式には、集団への加入機能・行政への異議申し立て機能・地域伝承の再表象機能など、地域の実情をふまえたさまざまな機能が付与されており、活用されているという。とくに筆者は、強飯式の様式が創造的に分化していき、各様式が活性化されていく過程を「文化の拮抗作用」という概念を用いて提示しており、理論的な考察も十分に吟味されたものといえる。

3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1 栃木県の強飯式に関しては、1977年に栃木県教育委員会による悉皆調査結果が刊行されているが、本論文の第2章では、その後40年間に激変した社会情勢を受けて、筆者が実施した更新調査の結果を提示している。また、他の各章においては、メディアの変化やボードレス化などの影響を受けた強飯式の「現在性」を深く掘り下げて論じている。新設された強卵式についても、筆者は共同研究者とと

もに、その歴史的形成過程に関する初めての学術調査をおこなっている。

- 3.4.2 強飯式に関する先行研究は、儀礼過程の報告こそあるが、当該社会の生活相全般を提示して、地域における強飯式の儀礼としての位置づけ・意味づけを明確に論じたものは僅少である。本論文は、幾度ものフィールドワークにもとづいて、各地の事例を徹視的かつ俯瞰的に把握することを試みた、実質的に初の強飯式の集成的研究であり、上記した先行研究を更新・発展させた新規的研究といえる。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は、以下の点において学術的・社会的意義がある。
 - 3.5.1 本論文は、各地でローカル化された強飯式の変化を、民俗の情報の編集・表象の過程として論じ、その動的・生成的なありようを描写した。さらに、複数の事例の比較検討にもとづいて俯瞰的に文化変容の過程を把握しようと試みた点においても、学術的に意義深い成果である。
 - 3.5.2 現代において強飯式は、外部者にとっての観光の対象、住民にとっての教育活動や自文化伝承の対象、あるいは報道メディアの取材対象などとして位置づけられており、その特異な性質とスペクタクル性をもって人気を博し、地域振興のためにさかんに活用されている。とりあげられた多くの強飯式は、各々が地域活性化の好例であり、すぐれて巧妙な自文化表現といえるだろう。本論文はそのモデルを提示できるものであり、実社会に還元しうる成果を含んでいる。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において人間科学に対する貢献がある。
 - 3.6.1 本論文は、基本的には文化人類学的な研究といえるが、強飯式の来歴や伝承への考察はおもに「民俗学」、住民生活への総合的な分析手法は「生活学」や「食文化学」、文化変容についての分析概念は「情報文化学」の先行研究を参考にしており、幅広く領域横断的な視座に基づいている。こうした本論文の学際的アプローチは、人間科学の志向するものでもあり、地域性や文化変容を対象にする多くの領域の研究に適用可能な業績といえる。
 - 3.6.2 本論文は、主要な研究手法として人類学的フィールドワークを用いている。強飯式の各事例調査における「運営体系および流儀が、地域内の社会関係を表象する」「祝賀の雰囲気の中かで、強飯式が地域住民の切実な問題を行政に異議申し立てする場となる」などの発見は、筆者が first-hand のデータを収集し続けてきたからこそ得られたといえる。また、先述のように、本論文は、実社会に還元しうる成果を含んでいる。人間科学もまた、現場と実践を志向する学術領域であり、本論文の成果は人間科学に資するものと考えられる。

4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- (1) MATSUDA, Shunsuke : 2014 Representativity of the Festival and Cultural Compulsion, in Wong, Heung Wah & Maegawa, Keiji (eds.) *Revisiting Colonial and Post-Colonial: Anthropological Studies of the Cultural Interface*, Bridge21 Publications, 153-177.
- (2) 松田俊介 : 2015 「伝統儀礼を活用した地域食の生成 一日光周域における食を通じた地域

活性化の事例から一」『食生活科学・文化及び環境に関する研究助成 研究紀要』第28巻、アサヒグループ学術振興財団、121-130頁。

- (3) 松田俊介、酒井貴広：2017「儀礼の創出と地域住民のアイデンティティ表象に関する研究」『生活學論叢』30号、1-14頁。（査読有り）
- (4) 松田俊介：2017「食責め儀礼における民衆文化の処世の構図」、伊藤純，藤井紘司，山越英嗣（編）『文化の遠近法』、言叢社、363-404頁。

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上